

平成 26 年 10 月号

今月の断酒表彰

☆ O・H さん 吹田支部 断酒六年

☆ W・M さん 吹田支部 断酒十三年

断酒表彰おめでとうございます。ますます
のご活躍を期待いたします。

断酒に思う (52)

内視鏡検査のすすめ

国立病院機構久里浜医療センター
臨床研究部長 横山 顕先生

自分は相当な酒飲みだという自覚がある人は、一度内視鏡検査を受けるべきです。特に、酒飲みでたばこを吸い、若いころはコップ1杯のビールで顔が赤くなる体質だった人は、ヨード染色法という食道の検査を1回は受けるべきだと思います。

今の内視鏡はとても良く見えるのですが、がんの有無しか診断できません。しかし、食道をヨード染色法で検査すると、がんの芽が見つかり、この食道が将来発がんするかわかってしまうのです。これは、重複多発するその他のがんの予測にもつながります。検査の結果、がんの芽が見つかった人は、2年に1回は普通の内視鏡検査を受けてほしいですね。

ヨード染色法の内視鏡検査は、大きい病院であればどこにでもあります。「酒飲みで食道がんが心配なので、ヨード染色法で食道の検査を受けたい」と言えばやってくれるでしょう。これはリスクの高い人に行う検査なので、言わなければやってくれませんか、人間ドックでもやりません。

一般的に発がんしてくるのは40代以降なので、30代で検査する必要はありません。ただ、アルコール依存症患者は、30代後半でも発がんする可能性があります。

アルコール依存症患者の60%が大腸腺腫を持っている。また、1日2合以上飲む人で大腸がんのリスクが2倍もあるわけですから、大腸検診も一度は受けたほうがいいですね。当院のアルコール依存症患者の60%が大腸腺腫というポリープを持っています。こんな集団は、他にはありません。このポリープの一部がゆっくり育って、大腸がんになっていくのです。3頁でお話したように、アルコール依存症になると大腸がんのリスクがかなり高まります。便潜血の有無にかかわらず、大腸がんがかなりの割合で発見されるのです。

当院では、検査のキャパシティの問題で便潜血検



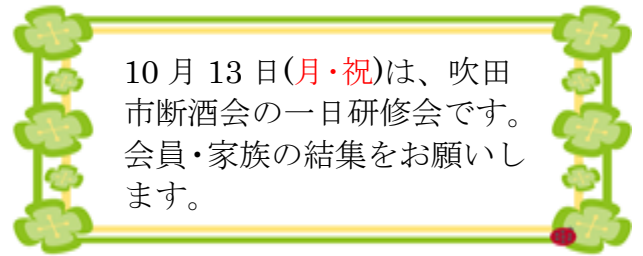
平成 26 年 10 月 1 日発行 No.140

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.net>

査の結果が陽性だった人にしか大腸の内視鏡検査を行っていません。しかし、陰性だった人にも、退院後に大腸検査を一度は受けるよう勧めています。

(アルコール健康医学協会 NEWS&REPORTS 平成25年11月号より抜粋)



10月13日(月・祝)は、吹田市断酒会の日研修会です。会員・家族の結集をお願いします。

今月の「指針と規範」断酒会規範

六 断酒例会は体験談に終始する

人は日々の生活体験を通してやさしさを育み、歪みをつくる。豊かな人間性を育て、壊す。長い人生の中で様々に変化する。そうした自分史をじっくり語ることによって、自分とは何か、生きるとはどういうことか、という人生の大テーマがくっきりと浮かんでくる。体験談以上に重みのある話はない。

中でもわれわれ酒害者のどん底体験はドラマチックである。ごく普通の生活から、酒のためとはいえ一転して敗者の暮らしに転落した。その泥沼から這い上がろうとしてはすべり落ちた。結果として自己破壊が進み、ついには自己喪失という最悪の状態にまで追い込まれた。

それが断酒会にめぐり逢うことによってまた一転し、喪失から獲得へ、依存から創造への道を歩んでいる。人生をスポーツにたとえると、われわれは一回きりのトーナメント戦を戦っているのではなく、リーグ戦を中盤から勝ち進んでおり、人生の敗者ではなかったことを実証した。その自分の酒害史と心の軌跡をじっくり語れば、もうこれ以上重い話はないであろう。

断酒会結成直後の高知の例会では、体験談はあまり語られていなかった。例会は月二回であり、半月ぶりに顔を合わせた出席者たちは、お互いの断酒を確認し、奮闘を賛え合った。そして、今後の健闘を誓い合って散会した。

体験を語るとしても、酒害ではなく酒歴の方を少し話す程度であった。何歳ごろから飲み始めたのか、どんな場所でのどのくらいの量を飲んだのか、どれだけの借金をつくったのか、アル中になったのは何歳

ぐらいであったのか、酒乱型だったのかおとなしい方であったのか、といったような話で、一度聞けば二度聞く必要のないような体験談であった。

結成翌年の昭和三十四年は七十名近い入会者がありながら次々と脱落し、ただのひとりも断酒に成功する人はいなかった。そのことで全員断酒できていた結成メンバーたちは悩み、苦しみ、その原因を真剣に探るようになった。

その翌年の昭和三十五年の入会者も、前年同様落伍者ばかりであった。ところが、もっとも早く脱落しそうな感じの某のみがきっちり断酒できていた。某はただ一人、妻を伴って例会に参加していた。会長の松村春繁（初代全断連会長）はそれを見て、理由はよくわからなかったが家族の出席を促すようになった。

当時の会員は明治、大正生まれの人が圧倒的に多く、自分の問題は自分で解決すべきだ。家族に協力を求めるのは男の恥であると考えていたので、某の妻以外の出席はなかったのである。

会員と同じ扱いを受けた妻たちは例会で、夫の酒の問題と、それに巻き込まれた自分の苦悩の体験を綿々と訴えた。ときには夫の悪口もあったが、それが参加者全員に感動をもたらし、例会の雰囲気を変えた。松村は家族の参加の重要性を敏感に悟った。

松村は例会で自分の酒害体験を話すことは稀であったが、以後、じっくり語るようになった。彼は、断酒会結成の一年半ほど前から自分ひとりで断酒していた経験があり、ひとりだけの断酒が可能だった原因を、ただひたすら自分のひどい酒の記憶を掘り起こし、当時の自分の心の動きを克明にノートに綴って反省したことにあると思っていたので、「例会は体験発表に始まり体験発表に終わる」と例会の在り方を位置づけた。以来、断酒に成功する酒害者が格段に増え、現在ではこの考え方がごく自然に断酒会の原則となっている。

(指針と規範 P71～P74)

